

~ 5
4962

1885

えりや

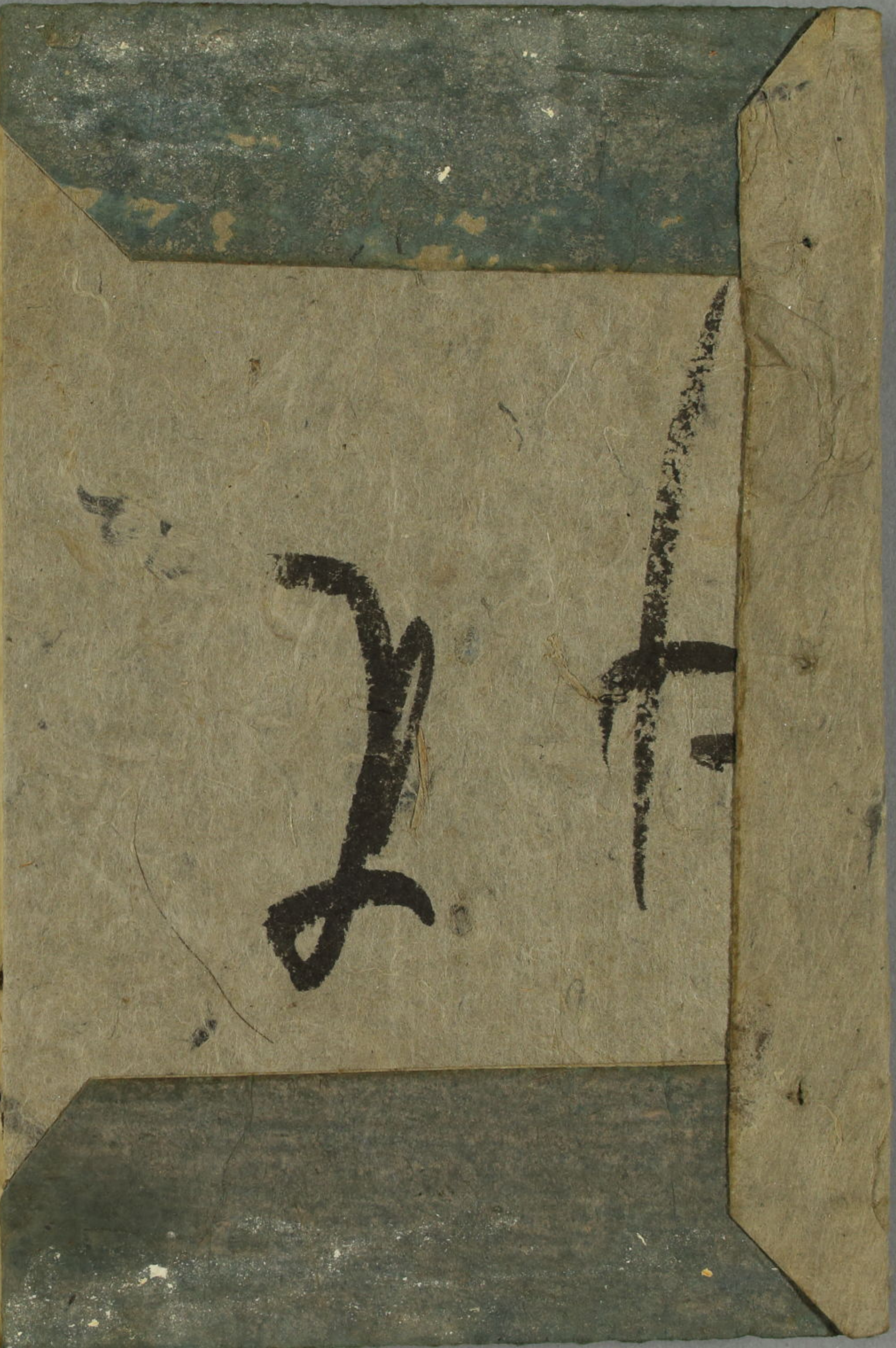
えりや 祢代わらふとやいふこと

春百二十五題

誹諧古今之撰

元日

大正 10. 10. 25
東京大学
文学部



門 へ 5
號 4962
卷

日孫房撰書の初と申すは、其書は、信陽上中若堂何系侯
の書と申す松尾を以て宗師の子知谷令作、后志七帝宗、
月院社撰七部大後、其書堂仁者、家信は、其倍後、多
うり、わいて道、をせし、と云
千鳥、其の、河、入、若、堂、何、侯、の、家、系、其、を、知、信、二、百、石、祝、の
人、の、中、に、云、え、福、七、年、書、五、十、一、年、を、華、に、松、尾、村、の、人、今、今、依、
流、せ、る、は、其、子、其、中、也、
白、教、八、九、三、十、年、の、信、も、何、り、は、内、を、
六百、石、を、在、り、は、信、も、何、り、は、内、を、

早稲田 大學 圖書館
昭和 31.10.5 焚
藏 書



世に流傳しつゝおのりて松尾屋辨の由及
も、大和教のしり、みも、り、の、その
理、松、尾、の、り、と、を、白、評、函、く、り、
り、り、の、論、あ、れ、も、之、松、尾、を、用、い、く、能
聲、に、通、く、能、物、を、第、一、也、り、云、と、て、高、位
物、識、も、自、在、の、り、松、尾、屋、辨、も、曲、言、と
其、中、の、是、と、い、く、を、と、り、た、我、宗、の、由、り

旭
舎

成にあり彼まゝ草木多敷の名を識し
つる教ねらんまに負享え祿の比の祀考
とるくまゝを文と誦ひて句と試りに柳青ハ
實に西上人の魂とあり杜部昂の腸と探り
みせむの簡古の中に十葉のあひと延宣成故
句とば使にあらりと彼風國の地に公
集を撰て是をを支考る後自記に補ふ
予をれらせると祀して解りせ祀し都合

六百二十餘句のあまうりて捨あたまゝの言の
おのりてまゝ葉の命元も覺れ本あき第々に
に季を分らぬりに雜の句を採りて巻に
芭蕉句選て歌考のあまうりてと園をわに
或ハ旅泊の情と思ひありといハ長別のことを
とあらむひにをるも集を統ひて巻に
に季のうり折と歌を加の乾坤を任の
巻も同行二人とあれと上りあの一と

無きにもあつていふて擇に寄一節毎に
 白果と銘く因志の友に追加を然くする風
 國の例もあつて今もみ花井の識有は本
 てる此信をいひてとぬといふ人誰肯元文
 三女平のふり一蓮花のふりよその意に七の

蓮花のふりよその意に七の

蓮花のふりよその意に七の
 蓮花のふりよその意に七の
 蓮花のふりよその意に七の
 蓮花のふりよその意に七の

伊賀上野 業師 五月次
 初今 旅 五ノ白
 け 信ととむに礼ふ別が
 長宗とにおもあしるぬが
 瀬戸亭
 上野とルベシ

夕選拾遺
 貞言三年
 貞言三年
 貞言三年
 貞言三年

春之部
 春之部
 春之部
 春之部

貞言三年 中素堂 具申三ツ
 子の白 一 部 一 丸ん 丸ん 丸ん
 布子 丸ん 丸ん 丸ん 丸ん
 莊子 画 丸ん
 丸ん 丸ん 丸ん 丸ん
 丸ん 丸ん 丸ん 丸ん
 丸ん 丸ん 丸ん 丸ん
 丸ん 丸ん 丸ん 丸ん

蓮花のふりよその意に七の
 蓮花のふりよその意に七の
 蓮花のふりよその意に七の
 蓮花のふりよその意に七の

蓮花のふりよその意に七の
 蓮花のふりよその意に七の
 蓮花のふりよその意に七の
 蓮花のふりよその意に七の

あつらにえの日のまをよあまを人あ

二言しめあつたせしよなよあまのよま

湖底のせを尾よまをむし

人清繪の筆のししめハ何佛

甚蕪にうらとう梨う月若葉あ

一とあつたにしち交つるうらとう葉あ

まをりれや尾をなまの山の釣あ

大日枝や引引ああひひとあ

は夕あ良ナセルるのほとやとら一記のニナリ

黄鸝や録に糞はらぬ椽のまを

常や柿のししし夜あまを

あつ香にめつと日の出あ山路あ

山里きああ遅しああああ

人ああああああああああ

あああああああああああ

あああああああああああ

あああああああああああ

乙段 東武行

は夕あ良ナセルるのほとやとら一記のニナリ

活子良のミトエカシうのハトハエハ

凄

十日あつや時月の
古くは

せきふぬら

雲原のれくもかき北の森

子成あし松お湯歩半の策

香に白し雲丹深ら丘の松の葉

凍ゆきあき雲う級深ら法も哉

初年に瓶の利し河くぬの那

漫形あ今や皴も合まの珠致の香

件物あまら

神籬やたもひもわきし温禊像

あけふやのたむをれくまのめ

傘にたしけんら松柳の年

八九同くく帰ふやけまこ哉

しれもあにさわ新命の志那ひ哉

栞柳 雲も元うね女 の那

鶯の置落しあま松の那

ゆきのぬ肩にあらぬ甲子哉

ゆきやばりぬきあのらき雲の
指さやきしゆきまのまき 二寸
苑の雲種を 上野の浅草の
早雲山平帯

苑成り山を日比の河と朗
昔城の標をさうらに

将人さくく集にゆり神の歌
哥ニ
山をさくく集にゆり神の歌
かつくく集にゆり神の歌
湖を眺む
捧多う二月中旬初めをひ

ふれの法令
ハ二月堂上七
日あり十日白
マテアリ

亭崎の松をむらり晴り
水元や米の宿の宿の島
上野のおもふに海をりくに人々幕
舞ひ入り米種宿を流す
あさつまおのち山雲のち松をなり
げ穂のむくし松をわわ
ちふわのちの松をけを松を

比川吉雲の松をぬもんをくら
大和のくに弟尾村
おのけ松に似る松を松を

何架のお苑の庄いそのあを茶良の
八重櫻の神と竹とれらと侍え

天下にけ我おまを
松風

ついでに

一里を歩くと早稲のりの子孫哉

あつた人の山歌にわづらひあり

檀のまはれもにかきまらぬまゝの哉

早稲のりもあつた早稲のりも

淋しきや早稲のりもあつた早稲のりも

比方より早稲のりもあつた早稲のりも

東行銭別

はな推水あまの早稲のりもあつた早稲のりも

ちのりやあまの早稲のりもあつた早稲のりも

露沾ふり

西行の早稲のりもあつた早稲のりも

根とて早稲のりもあつた早稲のりも

うほぬまの早稲のりも

早稲のりもあつた早稲のりも

物皆自得

あに花より花なららひと友あいの
増嶋も出よ浮世のあゝ東の
名

只終りく僧もあはれあり死の病
いふやうが土着の句アリト云

酒香し神ら舞わぬ新境のむ
酒の味は和のく三酒門ノ牧ニテ中をノ酒門ニ酒

憂方知酒聖貪覺涉神

朽木さのりテ

華に浮世の歌酒よく食ふま
本のもじりけいもさよまはし様哉

手の病なき様にゆきは舞きり
年くやさうととんやまもむのちり

百半ハバガウヘノ俗者ス切や浮命をま

形に似ぬ髪をとも出よしら様

富中の花より花のそ利まらり様
上六みけ子小父庫ニ嘆ミダストアリ

庭まじくほらむけやまらり様

あまのりく様えさうろ様本並
乾坤無佳

故に憚吟ふの庭前りり
凡羅坊ハ翁ノ
別号ハ尾張ノ杜ニナリ
別号岩若氣丸又云氣丸ト何れも表之

とあくのるむらひのり様哉

芭蕉翁ハ差堂ニ仕テ松尾
トキヲオチシリソキ路者トナリ
山歌
故云クハアリハ付實文六十年アリ

とあくのるむらひのり様哉

は夕吉我行脚のトキ笠ノウラカキノ多ナリ表ニハ
同行二人コノ
同様の尾張ノ杜ニナリ
別号岩若氣丸又云氣丸ト何れも表之
別号ハ尾張ノ翁ノ
別号ハ尾張ノ杜ニナリ
別号岩若氣丸又云氣丸ト何れも表之
別号ハ尾張ノ翁ノ
別号ハ尾張ノ杜ニナリ
別号岩若氣丸又云氣丸ト何れも表之

まゝら七重七葉伽羅八重さ九重
なご河じや蓄に喰あてく馬草の取

竹の根に厚皮くまはのくさ

中一落れ方一出つ

わけわのや白魚あろまごり一寸

鮎の子の糸あろま魚たくら別哉

蛭子鱒

あゝ魚やまゝ眼をりく法め細

竹登に柳様りり門人へを角

嵐をあら祭

あはらに柳と様や丸やと北餅

茶は白も何かろる代や籠の家

青柳の尻とまごりく沙を裁

永ま日と特茶くく習雲雀分

雲雀らり上に休し 峠 早あ耶

空より啼中の松もや鴉子の身

けりをのてし菜名
本菊寺の海あり
を牡丹十多しを
の時をのちのち
アキテ渡世の百五
むす右ノ白

先ニテ系仙
トアリ未末記
ト云

公神と別し 鹿角の兎 其角

元禄二年 細尾記の白

尾列名を屋ニテノて

吉野の柳の葉記別 峠ニテ

さつはまに晚なる夜しうじく漢
イセノ禰鳥ノ叱西行若ノを雨ナリ

三ノを雨ナリ

行基ノ記ノ事
山名ノありく
と鳴声ナケバ
恥ナリ一奥ノ院

父母共去きりし無し雛子ノ声

蛇喰ふとすまとおそし雛子ノ声

雀子と声鳴かこひ福はと火の巢

蝶のふらふらの架野中ノ日新哉

記すくあふにせんぬ新風蝶

古池や蛙飛さるむまらみまら

此ノ池川ニテノ叱古池傳し云モノモアリ

ルル 蚕屋 蚊火屋 鹿火屋 飼養

春 カヒヤ カイコケカハ 遠山よりのひやりのを墓 其聲

下ノ墓ノ声 猫 其妻の窸々此の架あふひり

蚊火ノ屋ノ下ニ 麦のーよあつらひら猫 其妻

カヒヤ 五月而二度火やノ烟ラテあめり 山田ノ考ニ陸(正三位家隆)

カヒヤ 川岸ニ 生飛チツクリ魚チ葉チリナリ 古本ニハモの上ありトアリ

宵の月 個事見し人 大和川柳の時

山吹や夕波の橋柳の白ふくさ

竹外て若うけら流や夜のもむ

山吹や夕波の橋柳の白ふくさ

石部ノ学
イガノ上ノ
甘香ヲ
元禄ノ
倉子武
合に令
アリ

山吹花の家葉あはれのかきり歌なるや
汗まに和奇は浦くく追付たり
白更に價あつらへしそらまなれ
鶴の草あはれあはれ花は葉あはれ
の蘭花もあはれにまり馬に
はてしなく
似合しや豆の粉ぬに櫻将
天のしあはせにせん二舞
さるるしとらん市匠 柳糸
その風をさむしとらん市匠
花の餅をさむしとらん市匠
草の中に燕魚の並居る

復く歌

紅花や紅花は冷の年おほく
竹の子やおほくおほく時
ひらり歌をうらうらに
日光

あはれとわく青葉よりあはれ日
美葉とわく青葉よりあはれ日
交来ともあはれとわく青葉

菽桂門を藤糸のの葉よりな

草舎の画額

藤糸の葉をよこや破れ家

蓬野舎

物の名をすりし萩のよもふを

江戸の浦一見の時

江戸きたにゆぬあましく木下署

杜よりうらも藤のおくはう疑

山崎宗澄日記

わりのまきあかへ弾すん燕ふ草

桃濱の別宅自画自撰

きくのあや牡丹の早急の客

園覚寺大那を島々年膝自の始の

迂地への誠や夢の心地せしむに

先道がそ角の方へもふくつとん

桜植て卯のむ弾むおみさう疑

灌佛の目にしりれあふ麻の子
日のみさらや葵かへ帰く女有る
本流れく葉掃も夕やも如帰
あつとあつたれくうまのひんた
須戸の佛士は矢先よりや鴈纏
下動濃を耳と香がて清く四人
来しとくも来ありくーやおまもる
一聲をけに横とよや蜀の魂
子親きえんやくかへや山鳥をこ

杜鵑啼く影ういそかー

不上一周忌翠水興行

杜鵑啼きやちまきあふ架を
うさあを淋くくせよ果はる
らんみりこらあらやあは子母墨の

落柿舎

柳をむにむくそふ料理の
尼の教まらんらうくや鬘蓮葉のむ

贈杜園子

公明を奉るに為る日大徳をわがるる

知田の堂見

堂見や初氏碑のまゝおぼろのな
牛の乳を落るるくらゐの端の堂の那
己の火を束くの堂やと毒女を端
あ君の蚊のちひささとと蛇をく
鱈年角婦を束くけよは廣く明る

憂人其旅のまゝおぼろの本曾の蠅

日旅に言ふれを村人の家と尋て

余を味む三日風ぬきくくく

あまよ中へ道留る

蚤虱馬の乳を落るるくらゐ

竿や雅付の蛇を束くけよ

黄鸝や竹の小菽と光成啼

牛膝田

降らひも牛植ふ白の叢と笠

奕兵今のふ川

早苗も我名し思まじ日め赤哉

志のぬまらのふと

ふる苗とらふもよこやむく志の物

漸くと尻形らりぬくうら田植のな

清水流り柳き芦の里田

の町にら架く

田一牧うとて五うらぬ那よ哉

又月あにかられぬも其や湫田の橋

五月あに雉乃浮葉をんにけん

大井川や水しく誇田壺年氏の

ゆとに石架て

みしるの穴あしけ大井川

仙人費の山に五うはれて赤危し

山あふれと屋あこり一取上川

酒後堂新設

八月のぬや色申あまのむらじの跡

夜中ぬ實方の塚を尋ね

置きやりのこま月おぬり三ち

箱根の園を敷く

月のかくふ阿や結文みり富士

義徳の太刀無交り名を留

めく什物とあ

佛の像を法
光堂と三什板
の像を法
佛と其言をス

あもたりものしにのち荒中
高蒲草足にむひららん草鞋の徳
標ゆふ斤ものたしとさす額を

正成の像

標子よつと新洞や楠のあ

國遊まこ山河の城ま

茶煮まうと笠を姿と財福を

かきと洞窟しぬ

ねつて地蔵のふ
鏡正とこれいふ
現流のふれもの
まうのふれもの

夏州や兵としく夏みあは

殺生石

石の香や夏神高く夏暑く
汗をえを流しぬれん紅のま
眉掃で候し紅みまな

こ百奇

なとりのせん葉の枝よあの日ま
陰奥に下らんこゆりま

旅五りの那頃をぬきよとりのまに
柳翠草の住らんとるを流すを
分のりね道すあしをり中ぬ
つまれこ

梯負よ人と校折の夏神のな
人く送りて残りの白あつさ
夏の穂茂らふにつもじ別れ式
甲斐のまみおあにまあこ

主行亭

行説の巻に風の中を歩くこのふ

管をきき青雲をあらや茄子汁

道の奥を海沙にせんむの縁

根の草人や葉のきこむ世は酒

紫陽のや帷子か所は清涼の

群のあを路にゆく因

旅人のあくるよるの推の子

栗とりのあはぬのふと出て西

渾ちにほりありと行其あそびの

一と枝もよむと目も移るよ

世は人のんつけぬ子母や朝の栗

ぬて外ぬきも人も人の聲

境路も初めやうなり憚の声

山に石にまらると山寺あり

健景寂莫とてん流川を架

閑さやあふふあふの聲憚の声

明石の秋物

續盃やしうりもさるるをさるるの
夏の夕涼風ゆるりやて森坂や
大井川波に巻かす夏の月
月をのまきとるまのやうなる次なる
雲乃峰いづれは飛んで月をさ
さるるや風の薫りけ相抱子

大井の像

風乃峰の月鐵や襦もはくろるる

小倉の

松林とほめてや月を薫るる
夕も月をにぞつる春の月を
春と暮と一なるに月をのりて
初冬の月をてやとらん端よせ
夕露に今よ荒る清く月を
鼓ふおり弟橋の海をのりて

岐阜と事

面白くて折て遊あそぶまの船舟哉
暁あけく小形交まじりううえの腕うでを賜
松まつ葉は賣うりかたの人もも舞まいあらん
藤ふじ食くせ生なまぬらんらん川がわつは
ままさ月づきやや翻かるるもも地ち鯨くじら
蓮れん花は香かに月づきをかよよここししんんやや初はつの鼻はな
暑あつき日ひを海うみへへの流ながるるるる元もと上うへ川が

濁にごりももああららもも同どうくく岩いわ法はふ有あ
法はふ鏡かがみのの水みづ波なみくくせせくく大おほ敷しき草くさ
窓まどありありにに藍あゐ藤ふじ花はな香かやや簾すだ草くさ
涼すずくくをを給たまへへににららりりくくうう屋や敷しきのの行ゆき
涼すずくくををああららるるくく福ふくききるるくく

野々新宅

涼すずくくををああららるるくくくくつつな
涼すずくくををああららるるくくくく枝えだはは秋あき

いりつり月にもあはれあきき
いりつりや鶴経儒て法も

西折橋

夕晴や橋より海舟は波舟も
忘れきとさし中しと海舟
川中の根舟にぬらり婦海舟
廣波風舟入日や流き夕海舟
川風や流るるをよき夕海舟

破風に一日新やとら夕納涼

木節亭

秋半さし舟とら夕納涼
折やあしと布舟とら夕納涼
夏舟とら舟とら夕納涼
橋より松舟とら夕納涼
流るる舟とら夕納涼
さし流舟とら夕納涼
白けしや舟とら夕納涼

鶯鳥うらるる矢も後のうらむもて
魚らんれし首能命命まほしくる哉
夕影に干甄むししく好をきり

(Faint bleed-through text from the reverse side)

神月やひるまゝの

(Marginal notes in red ink)
うらるるや
おともし山田のお
秋のまゝ
つぐやゆの
さるの
てむろひ
杯の
むく
お
のわ

秋之部

初秋やあゝ人かゝれ紋のおの秋
セツや秋と定むらゝめの夜
セツにあゝ福とくくの結合ね
み月や六日も常におととの川
合飲のは葉のものものものものも
福葉や園のりりの静静のの聲年

(Marginal notes in red ink)
大坂を柏原
秋の
元禄七年九月廿八日未明詠諸
畦止亭トモアリ

福来あそびにしろ言ふも果て燭哉

加賀の土をよめること

熊坂の田わたりやうらむれ魂こりり

園を越る日きぬ海路のくはる雲

と流れしこと

音くらくれ富士とくぬ白く面ぶき

葎や海よりうらぬゆきうらうらな

けふの雨記の字は左海路の川流経の字をよめる
日記の字は左海路の川流経の字をよめる
閑実

別館よりひの渡あらし春門は垣

嵐をよる鐘に渡を空くれば

別館よりよむ書きさへえあれく

白雲もあはれぬ萩はうしゆり哉

加賀の山松く

流てり人もたぐやぶの萩

小萩もあはれぬ萩はうしゆり哉

あまのうらぐと萩あまや女命

信州上入り

あまのうらぐと萩あまや女命

舟と成板しなる月の芭蕉の舟
しるしをみり平の能の白せよと
よて白き館せしるにむけはし
葉の香ややぢれ廻に多きもの香
葉いりくたのく死のくおあか
鶴似やての葉の付野赤く
音あはれとまき若者のて氣うな

画観

校ありれ日にくかろるまき若
戦後のむき向のふ来にあつて
葉の園にりれの子母と中まき
鬼灯を實りもまきあめめお葉
もくてもあるあきさのものど葉
魚居奄

叶は戸とあれや穂葉に葉
道中遠の本権馬に冷れり

堂下ニトルチ
若僧トモ能
双チカハハ階ノ
モトニテ遊茶カ
中の柳テトルチ
九アハ又サテシ
その詩わう
去ステは

一 葉の香ややぢれ廻に多きもの香
葉いりくたのく死のくおあか
鶴似やての葉の付野赤く
音あはれとまき若者のて氣うな

は夕中并ラシ
元はハセツ

床にきて新しきものやきりくは
白髪ぬく机女下や鱧鱒

右田の神社、宿實の盛、甲斐の
功植口の六郎、伎せしり物終り

縁起しんをええ

すしややぬ甲の下は蝶 蝶

簾屋の声とさうし集る中の店
蜻蛉や元付わ祈り 葉はう

文禄七の事を
氏云席を
さすりし

小ぢらにもあそび秋ぬら葉虫哉

花はなをとりとも都は十雀
夢の目み今や暮ぬき啼鶴

福雀茶の事細や逃しこし
あしそ啼屋をきくおひ麻

早稲の香やふ入あそを磯法
葛麦とまじり華にゆき山崎

は夕中并ラシ
元はハセツ

豊田しして

十日菊
蓮池主翁
菊子合ふ時日

廿六夜

十六夜や海光有るの夜のそよみの雲
如きくくおてのさよふ月を雲
本方の瘦もまじい雲の後に後の月

十二夜の夕ニ
アラス跡染木
ノエニテリ素盞登
亭ニテノ夕ナリ

任右ノク

三日月や別れのあいつる月を
山をくくの庭やまはれ月

淡めく月をくく入よ源仲雲

江列堅田ニテノ此

燧山

我前謹言
まことのヒケルヨシ

月さよよ明智の素月新しん
秋もくくやくく有るに月の形
義仲の扉の山光月り那
月のまの面に相撲もあかりり
松折のふかゆき月の名跡哉
早く咲九白も色く菊は茶

乙列の白クレテ
沼チタツサヘテ
玉一舟

茶の戸や日暮くく異く菊は酒
竹菴はあ

龍河の菊やのうかり水の跡

本園高し

本園高しハ高野の園大坂ノ左ノナリ一休ノ亭ニ
山居セテ上田ニ及
味ノハ半ノ僕
と云ヒトクニ云フヨ
ミノクニ又
如行幸ニテ

葛植し竹にみ本の何しし

中此宮の多長に寄るもかうり

松茸や初ぬ本此宮の庭らん付

枝の多しむくの形考や初河し

笠日記ニ支考
ヤニト云セツ
アリ蜜柑ノイロト云集ニ也スモ中ニアリ

山々皆蜜柑の色此宮にらんて

秋風の吹くも喜し

秋風不破や萩も初も

牛乳海に蚊の声

河のく目とつれかく此秋の風
源ハハルテ
加刺一第其墓に清く
西上人

塚もろくけ身はる

伊勢の鳥武うさう義彰に似る

秋の月とつれの前似らん

義解のふに似たり秋北風

貞享甲子の秋八月の上の破家也

あつ風か戸さう詠をけあり

野さしとんとに風のあむ牙うな

猪もさしに吹く野分の那

吹ぬ石も歩同れ野さうな

乳麩の下あまたらつるおぢさうな

朝もさしおねらぬの斤心

車廂高

おろろさ秋の朝露や耳う張

秋めおと歩器しる断のな

枯枝に鳥のさありりり秋の暮

人の怨とらるあられこゝ長と

そくろりおのれ

物りて唇ささしあはのう来

そくろりおのれ

湖南幻住庵ニテノ吟詠ハ六十我ハ五十ハ一老早ニ一季ノ
茶玄方トナシ
又盤盃亦後向ノ像画云々井後向ノ画云々トモ云別卷不審

晴清秋をくま

ふさい家や雀らう返る歸肯戸の秋

暮の淋しき感に堪へり

沸しきや陽てく福くらの浦の秋

涼れそえられは御まは酒への秋

行くらまの送りつ果を木曾の秋

は秋を何に年へる雲へり

大坂は多葉をば帝丸也の雨と

葉をば命んつハ天玉るは潔なり

文神記の秋
及日記ニミ
三ノ也ト云相違

元禄七年迄のニテノ也ナリ

笠置ノ秋
ニテノ也

ね風の新とめら葉をく秋くれぬ

行神の軒多葉もくやと密林

は秋や身へ引まきく三布ふん

り秋やふもさあけらる栗木のいっ

葉のふあ落ちて拾ひしぬのこかな

栗林の店を踏界のふんを

ひやくと葉とぬきひく蓋露か

大和と行柳くく葛下郡の行の

内四里あれば日以増りて足と休
む寂らる奥に家あり

縁うや翠にあくさむ井の木く
晦日月に千歳を扱と抱く嵐
唐稷や新端を秋と五ちうひ
秋清棠西瓦の色棠吟に孝梨
舞火に何麻や信を下むせむ

神九上田の
すて右赤と
許六のモト
はては
云々

お葺やかあれへかよと松を
は寺をそ庭一とむいそ芭蕉の終

元禄七八月七
日ノ夜汗が
原に羽幸ニ方ニテ
卒仙
を以て通
多分は日中
也とて胡
云者ニ上
とこれ
元禄ノ以
湖東近村傍
舟上五
葉名氏何カ
氏ニ命アリ

祖父と父と子の庭や柿も
里保く柿のあもさ
目しめらるるや
剥るも
刈断や
江鮭あり
むし
葺や
雲霧初
鬼灯
秋
水
辛
秋のそ
あ
被風や
九月
秋のそ
あ
被風や

大津智月。おのの尼の叱や志加文の書
ト云尼ノ住家 成りきりくまを年のくれ
尋テテナノガ 子ノカおトカ
ヤ老の後ハアタリ際し行 冬之部
リシト云テ思ヒ出シテ。

貞任流の 雅名やまお家の北歌中

初時を獲も小義と何し事こ

元禄六年の氏をいふ根許の年
三ノルヒ 眼の才人毛年と終しり時お

馬士冬あらしく時ぬ身大井川

山城へ井出の駕あ新時ぬ哉

け夕上ふ文を相違し伯松集
一尾根トアリ 一ノ根冬あらしくまを年のくれ
け後ニヨルヘシ山ノ尾根ナリ

かひはむり良 雲あらしや田おあらしかぬの思むれ
又百廿七又を入

元禄三年の冬雲集の春の鳥より
即ち、紙とて時田お歌塚年

家に泊る

霜のしして谷とるを春あらしお家のな
竹花火もあらしあらし夜 此聲
今屏の松あらしよあらしも

干川

さし流るるをくつれあひまじしのおねみね
は白雲日記にありあきしし霜の香とアリ也ニヨルニ
存中

茶のむししても霜のすくららこの茶

有仙やあき清子の友にけり

三ツ新城ノ白雲ノ
兄弟ノ子ニ
桃先桃後ト

白雲ノ
寒菊や粉糖のかく教白の端

信濃此やうらり

わらわらや種家の菊の弁桃く

老かゝるもなうりてやわらわの枯茂も

葉花年尚寺う

冬牡丹干多くわらわの如帰

志のあさへ枯く餅ふやうらりうな

おお後障成汚て

兼みか枯て衣をなほひ牛の種

鞍毎に小坊うきあや大根引

あきあき馬よに水白新法研

イテコ語記ハノニ三ツ天津橋子ニテハ

心めしき方やうきまの松木道
新氷に毘毘きく朝のりれ哉
初をりや多仙の葉の多しや
初をりやソの大佛のしりたて
元禄己冬大佛を再行ハトキ南都ニテノ也
初雪やうけ掛くはりのうへ
原川ノ橋半カカリタル叶ノ也
うりまきや幸 庭に 石在奈
うりまきや幸 庭に 石在奈
箱根越人もららう今釣の雲

二人えんしき方やうきまの松木道
去年越人月送ニテイラキ語の解ハ今年越人カ
モサレシツ 雪山自画自撰
庭掃くまきと初をりや 帚の奈
沼のめはのしき痛れぬおのれ
心まゆはからうんに 情あをるを
日ひしき鳥もをらぬ河しき哉
あめおろしきうんに 千九郎飯子哉
まき毎にうりまき 撓や 行若成

比三夕杜園
ヲ宿シトキ
日樂ノ夕ニ

多しとて身ヲ寄結竹共事ニまか
三とさく一柳ありあらのあし大なる
尾州ニ仲河ニまゝ人と宿めし連
をりし寄けり有御を兵衣在り
比良三上からし一酒歩路寄り橋
宿多しひしりん又付そくましく心さるる時
二月堂 祈り
ありや水に傍み皆のたみ

清く移て鴨の声不の初にふ

写の夜や葉をすくく啼く

唐詩の園をよんよやく

驚よつみさぬく鴨共只

葱ふく咲ひまうまぬあむさ哉

風来寺 祈り

おまひしんいのまきしん

松よ焚くて裁りあさむさ

風来寺 祈り
三列 祈り
イラコ 祈り
杜小 祈り

イラコ 祈り
杜小 祈り

雜く部

酒吞岳の歌人の伝

月華もあつく酒のそとに

布袋の襖

おぼしや袋のうしろに
赤いのは杖つを故を

田木三三堂

清くさす身に香たしく黒羽

茶のむや利休の目山あり

其あにあつたて留め霄折式

四障もはのうに雲を首を

手あし指をぬを持た

石細し角力取中の平

石日紅しつは又日き

雲おく人と休む

幸立やほアリ芭蕉居の弟入ハ瓢ニテアリモ瓢に素堂賛曰
一瓢重泰山 似合しや刺年婦のさき米又年
自笑祢箕山莫貫首陽飢牛飯額山

防川亭

香を探る梅に菊うらる刺總武
夕虫のゆく萩の後りに指獨五て
淺水の橋を海り何借に河さうら
し子流女納言の橋いと河り一糸
船を流とらるある架
河さむりや月えの徳此のくもれ

先多女むむ雅のあも河るも及は五
馬げくく萩と徳にら萩萩が
眼も一おとやと糸草 けり 年集
月冬何國流と去はある海の底
みく女の津跡しとやむり堂
船もさぞけ萩しととあさあけ
風流もくくめや奥の田植うら
藤にささくく白魚やととく滑ぬ

二枚にうわきとわたり麻の角

荒糸角まゝ旧をニナ申良ニテ別のわたり終成

猫の声やむ所園のおほらるる

山路まゝ笠原山うす針糸の甚ま年々何やらわか好くは後う深くむ西行草州

尚帰らう衣れき伏見の志賀之親ノトキ途中ノ時ナリとも云堀糸まき出草

古畑に糸掃掃暁男とも

心ゆくけの珍碩カタリの居も終う多めを此のそりの覚めんと軌集ニナリく流の牛

木層の情雪けの珍碩カタリやけし男う多めを此のそりの覚めんと軌集ニナリく妻の草

甘露梅山

山寺糸まきけの珍碩カタリいしつけの珍碩カタリけよけの珍碩カタリ辭は糸

葉細けの珍碩カタリにけの珍碩カタリ手糸けの珍碩カタリ人糸けの珍碩カタリ糸けの珍碩カタリ雀けの珍碩カタリの那

ほろけの珍碩カタリくと山吹けの珍碩カタリちけの珍碩カタリ糸けの珍碩カタリ滝けの珍碩カタリ糸けの珍碩カタリ音

望湖水惜春

初妻と糸けの珍碩カタリの人の木けの珍碩カタリ一けの珍碩カタリみけの珍碩カタリらり

前途三千里けの珍碩カタリの糸けの珍碩カタリひけの珍碩カタリ掬けの珍碩カタリに寒けの珍碩カタリりて糸

南けの珍碩カタリのけの珍碩カタリ方けの珍碩カタリに離別けの珍碩カタリのけの珍碩カタリ泪けの珍碩カタリとけの珍碩カタリ綿けの珍碩カタリよ

裸けの珍碩カタリとけの珍碩カタリまけの珍碩カタリのけの珍碩カタリ衣けの珍碩カタリ更けの珍碩カタリ糸けの珍碩カタリのけの珍碩カタリ嵐けの珍碩カタリのけの珍碩カタリ草

又神のつた
の恵心僧
ク門アテテ良
袖テシホリ
日ハルハぬめ

二月十七日
二月十七日
二月十七日

子に飽くもあまの人あはれもあし

まきいぬに上りくられし御製の

つりくさきいぬを尚

敵あそく旅あ氏や 二戻 寛

蛸くろき法書と冬老 何と問は

鶴の巢もいんりく 葉の葉成り

菊の後の扇おく 海をさやま

落き海にあまをいんむ 桔

西上人魚列
蛤ト昔同シ
蛸ヲモカシテ
申スル

不二のり桔にうられ家に以春
篠のあ穉にくけく 我とあな

雲岩の奥

木塚も扇を破らひ 菱木互

二交桐葉ふり 祥のいりく今や東

下らんく 暮りた

牡丹葉ふりく 分お 蜂の居跡

卵のむやんき 柳のあまい

鳥破うりの声終〜 社 宇
社を聲年横〜ふや水はう〜
鱸多うふりき梅は早新らか
玉母大竹ふと浅新 子
子親啼やみ尺は 萬蒲料
思にらふき茨とつらむ百羽成
名護ふら
世と藤に代かく小田の折處り

みりふや蚕がよ葉は 物
髪せとてま新青〜 又月夜
もろきい人にあ〜らん人も及せむ
伴夏の鮫の思吟の葉門 去年の秋分
江脚〜らに我名を写て葉の物わ
道つれも〜尾張のゆを端を去るえ
来〜らうりは
心は休に穂麦喰らん 葉海冬ら

青くくや菊餅の穂に出たりん
紫陽華や萩と小庭を別たて
象深き由や西施の合飲の子糸

大津湖山宮

け君も多鶴も老らるる尻の那

大津川々さやま
及びクリシテ
伏す龍を
いふ

多鶴と人の言てや作のゆり

盤夜後向の画に撰

周庭もて何れん人共皆津浦
初りくくと何れ新庭や雲の峰

水月や峰に雲たぐ何れ山
湖や暑をよくし雲の 峯
仇の毒をよみりね新和青後春
柳葉裏行の春深く 祀ま仇
身に似たり二つに似し 春仇哉
山陰や文と養とん 春葉とんけ
子竹ふら登形 咲智仇むかん
壺盧や秋冬ゆん くの瓶かな

子影や酔く影出は寝た宛
若くはあひの影細くもものえ侍
やま幕のけしきあひあされ
人く福家の本敷に席を設て坐
せ笑ふて
又ふらひもよの河を鮎鮎

政彥山

城跡や古井も清き先回す

深くさやかの三日午もぬま山

岡吾と名ひ立人の群もゆく

深くさや指馬にもゆふまのわ

飯やうの喉の地をや夕暮あゝ

酒田の藩にりふ瀏菴も玉とふ

医師の群も若と赤

阿の山吹浦のちく夕暮あゝ

る衣のしる風と取片や赤

有わくやまをわく南谷
卯の毒に母なき病を冷く交
山麓のたわひ海難むららうな
血の皮むいぬまらう運意生
まふに足跡を伴す首途哉
今沃の山枝と云老わりのあにた
送りしつては雨すそをくし来る今
膝に別れを帯て

赤云

物書く扇引裂く余波の車

大水をそそぐ河もほよと濁り一統せうけて遍照と小田の初夜に
ありあり雨夜の
目星のふとナリサ余町の初に世の中をいとも
いそ二人の
後通の
雲の上を
昔の
七タ
合
赤と二人探

何れも法や他流に横より浪河
福業あに物ぬ人々尊さよ

何の雲き福業あせまら便の車

本馬まらう宅に骸骨たの笛鼓を

あまひて能はる雨と画して華意の

壁に城より誠は生糸の裁拵を

いぢひしも形常や彼羅羅と花と
して流に表現をうらむるもさあ
生前のまゝのさるや

福妻や教のそらろりつ花 子 穂
霊奠りもも焼場のまぢむり哉

尼持貞の身すかりつらとばて
救ぬぬ身とあねむひそ魂 祭

甲子の夏大津に伝へて兄のもとを

消島せられられと四里に帰しとく
益舎せりておせとく

家々みな枝に白髪女の奠お祈り

むりつ時 秩父殿さるえ角力丸
画質ナルヨシ
今目よりし書付消せ置のあ
昔良ハねと痛も
多とれゆきも
昔秋のむと云
送う如子も又

画横

西行の草鞋もうつ流松のあ
西上人の仲居の跡と奥の院を恋

谷の子二町才入かのとくくの清
多とせうくくかきしんてんてん

とくくくくくくくくくく

二上山達戸寺へ訪る庭上の松を
二えの浦へ

硯うく拾あやくやく石女あ
物影に我ら食吟りし胃の車
二上山達戸寺へ訪る庭上の松を

とくくくくくくくくくく
汲はるをわともくくくくくく
西上人

見々に凡千くあも終るる形舞大
方北橋くくく縁に飛りれて弁介
の罪とすぬく途あるい幸にいで尊く
傍帯表死あし梨法のみ川
萩尔や一抱冬やしあ山の犬

狼も一抱を居せ萩うもくくも有
高堂の母七十りまり七年の神七月

万葉集二秋の七
萩 萩 桔梗
萩 萩 萩 萩
萩 萩 萩 萩

七日持たるる美華七種とめて歌とて
外六人角秋風曾良治法嵐葉玉堂

又一説ニ萩朝貞尾
はニ改らるらむ
万葉集ノ氣に
也とて七行を
は七行ハ日月の七行イハ北
田木の云
萩枯硬尾元著
又朝貞の字

是に連歌も七人ハ嵯峨に帰れ

七禮の萩のゆりもさや早秋

ね美の石や小貝に更萩萩の巻

志多しき名や小松吹萩薄

玉川の水に折尾飛そらみあえ
か
守栄院

後醍醐帝の冲渡と評

沖瀬年終りそ悲しく何ぞ忘れ奉

意こそて宵は暮るむしの聲

海士の家に海老葉あはれし

新詠やま福くくく鴨の声

桐の木に鶯啼如歌塚の内

名もやなほに美しき歌もなし

米貝くちか今宵の月あはれ

は夕ツレくそに善者三友ニ智アルトモ又子路ク言ノ善ニモアリ
万葉集ノ
思ハハけけ飯と喰て
思ハハけけ飯と喰て

三日午の地冬打掃る路や若草畑
尾張大なる根常住院ニ控テ真跡アリ 丑条坊不空碑ヲ正元三年月
ト云伯松集 何事の人立しも似春三日身
又笠日記ニハ河のほとりひまきしし似春三日の
真跡カクノ如アレハ是ニヨルニ
月菜初七日墓告詣

えーやま七日を墓女三日の身
常陸へまゐりる舟申と

吉田ノ事好 曙や廿七夜も 三日此は
師ノ事かとも人をもて身の後や晦日にをきりか風の事
海川の末めお松とる前に舟さし
川上とさの川下や身友
船ひつや月えの旅のめとあれ 船木松敷前名取
一条阿アサム

ツト書ルトコロアリ

侍や疾おと茶泣 月のこも

湯尾峠 湯尾峠ノ跡ノ跡シヤクシトテ抱齋守セル 抱齋
けの信別 湯尾峠ノ跡ニ
我前ノクテリ 湯尾峠ノ跡ノ跡シヤクシトテ抱齋守セル 抱齋
あるは也ハハ 湯尾峠ノ跡ノ跡シヤクシトテ抱齋守セル 抱齋
道不也ハハ 湯尾峠ノ跡ノ跡シヤクシトテ抱齋守セル 抱齋
真跡常陸ノ川 左右子取ナリ 俗名本道

悼遠流の天者法師

てとをねまのえき法女身
右法印羽黒山ノ別當ハ丈庵ハ左近ナリ
新島を以角な新と宮の身

大坂町止高下送見

残雪小敷の中山に
あけりて忽ちよ
れりりく

馬に寝る跡
足跡遠く
葉の爛

石のつとハ可
トハ略言
カヒシコトモ
カト云モ非
カヒシコトモ
カト云モ非
カヒシコトモ
カト云モ非

獨吉
タトリケルニ
言ニツクサレ
院ノ境ノ境
タル人多クハ
スヤ坊ニ夜ヲ
カリニ

石のつとハ可
トハ略言
カヒシコトモ
カト云モ非
カヒシコトモ
カト云モ非
カヒシコトモ
カト云モ非

葉の香に
打言
琴管
福に
葉の
秋
葉も

山
の
葉
の
葉

葉の香に
打言
琴管
福に
葉の
秋
葉も

菊の根大根の外さうになり
菊の香や庭に切つて敷く庭の庭
菊の成る菊良と露波に花を
菊の香之様の花や菊の香その香と菊の香佛達
又下の何れや菊の香の菊
瘦くあらう菊の香の菊の香
初芽や菊にかきしぬ秋の菊
この草や菊の香の菊の香
加水別野

菊 長き菊 菊の香 菊の香 菊の香
本層の菊 菊の香 菊の香
途中の菊 俣松余心菊

秋風におきて菊の香
菊の香 加賀山菊 菊の香
菊の木を菊の香
富士川の菊の香
菊の香

時を聞人控ふに神を風吹りに

今昌らとらふ事流

終夜神風きくやうらのやま

石山の石よりあーあまき風

方にきみく大根幸一神の風

西東何れも荒もたかー秋の風

神神皇正統記神野とて一時きゆさうーと

心にたれいひ旅五つれい

死ふくも旅を果や神のくれ

世のやい人かーにあまのくれ

人聲やびるあえ新阿まきあ音

神十年かいつくは戸をさき古々

神に神行もやまき小松原

長月の初め古々に海く母の白髪

とくー神宮の子玉も宮を母

ちう眉もや、老らりと皆く道く

多に〜は清々後を阿つさ神の雲
（けふの世を〜）
阿の葉房に心さなるれ〜

神高〜の毎にむけや尻茄子
（細路の所ノセツ加割ニテノ也）
を爪や〜のし〜の歌子歌

懐光柱

蟹月と〜暮秋物も〜の雀子
西行谷の奥に流阿りぬたの芋波と
芋波と女ぬりありえ奇一隊

院て何の月院暮々奈良葉 容
猿引を猿女山神の石の飛
蛤の婦〜のえ〜の神を
（二）
か〜ぬ〜の葉針に 蔓椒
暫〜陽長〜の人〜
子〜の梅奴〜の女〜の葉
風や頼〜の〜の歌

多〜の松現〜

今野おつこ
甲斐守おつこ
兼あつ子の浦

官人も我名をとらうか
多田権記トモアリ

の思寺いへ

さうとうの洞と流うさう
三尺の山をあらう
釜山力谷おろくに
芥焼や暮る端の田井の初様
氷まろく偃靡に咽とら
范最蝨、趙南のふとらう山家集

の歌にあらふ

一ちあも豊さうぬ
初まろや雪小傾の
おまろきさう
市人にしてあま
名百屋ノ抱月亭ニテ
君火焚け
真跡ニ君火とたけとアリ
雪の形おと
たさなる名や

埋やも消や相み草ふたれ

婦ふた世志のひく

おのの後かてしと暗新火桶哉

月菜女悪に計あえんきりあ入

婦拂とね一本のあふし一か那

婦おにこう棚つね 大又あな

年の市縁番賣ふあまやな

有明夜ゆりにをく餅のねと

兼好法師
奇に有とあに人をもてれそ者の祀や世日をさしちのあを月

年忘の運流りくくし水渡おらん

アヲトウトク 甚モトウトクシ何者信傳ン何者ウラツト、
メテナキ紫本昔今愛ニ現生 小町の画襖

アヲトウトク 何者信傳ン何者ウラツト、
モカカタチアルトキハ魂モ又
愛ニアラシキモモシシ

勢田沖造管

とき直月鏡も清くゆきの玉

旧婦や嫁の尻に泣くくのくれ

盗人は盗りし女あもあり年の暮

魚多れふきくから暮年のくれ

時あゆむ船の神繩にとり付て
社個の事とつとあ勝と争と誓
の事とつと争とつと

伊賀ノ山中
三ノ子統ト松
夕てヒリテ

元禄三年
尾張防川
三ノ子統ト松

差よりも現るお病をそれぬし
米常りにわらお侍中や技匠仲
まの仲東急お波の歌次つと終
三列おひしつとあつと
材料とや嘆けはむ保員人の里

三聖人の意

月集のなれや滅の何ぞとあち
集本権とつとつとあつと
誰人おあもあつとあつとあつと
おと権に三率むけよ社
粟禪とつとつとつとあつと
旅人と我旅つとつとあつと
貧弱と本質つとつとあつと

神屋

神屋の音 神屋の音

神屋の音 神屋の音

神屋

神屋の音 神屋の音

神屋

神屋の音 神屋の音

神屋

神屋

